

雅楽の旋律型の研究 : F' β 値を用いた『明治撰定譜・筆筈譜』のパターン抽出を通して

竹下, 秋雄

<https://hdl.handle.net/2324/4475137>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 竹下秋雄

論 文 名 : 雅楽の旋律型の研究
 F'_{β} 値を用いた『明治撰定譜・箏篋譜』のパターン抽出を通して

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では雅楽の標準的楽譜である『明治撰定譜・箏篋譜』をデータ化し、分析を行うことで特徴的パターンを抽出した。また、特徴的パターンと演奏音源を照合することにより、雅楽の旋律型を確定した。

雅楽は、中国から朝鮮半島経由で日本に伝来し、宮廷音楽として根付いた日本の伝統音楽である。

雅楽の研究は歴史研究、「過去の雅楽」についての研究がほとんどであり、「現在の雅楽」に対する音楽的な研究はあまり多くない。これは室町時代の応仁の乱、および明治時代の『明治撰定譜』撰定の際の混乱で多くの楽曲が失われたこと、および雅楽は時代と共に変化し続けてきたことから、「過去の雅楽こそ正統である」という思想と関係するよう思う。しかし、雅楽の「過去」の姿を探るには、対比として「現代の雅楽」を知らなければならない。

現代の雅楽について知るためには、旋律型の研究は不可欠である。雅楽の旋律は多数の旋律型の組み合わせで構成されているためである。しかし、先行研究における旋律型は雅楽すべての旋律の中のごく一部を示しているに過ぎず、すべての旋律の中での旋律型の位置付けを示す必要がある。

雅楽の旋律型は、雅楽の標準的楽譜でありもっとも広く普及している『明治撰定譜』から読み取ることができる。しかし『明治撰定譜』は奏法譜であること、「塩梅」が楽譜上に記述がないことから、その読解は非経験者には困難である。読解は経験的に行われており、明文化されたルールがないため、雅楽習得の敷居を高くしてしまっている。雅楽の伝承および普及という観点からみても、雅楽の旋律型についての研究は急務である。

そこで、本研究の目的は、雅楽の標準的楽譜でありもっとも広く普及している楽譜である『明治撰定譜』から雅楽の主旋律を担当する楽器「箏篋」の旋律型を抽出することとした。旋律型抽出の方法として、雅楽の旋律型研究の課題および先行研究の問題点を鑑みて、演奏者や採譜者の影響を受けにくく、多数の旋律型を抽出でき、旋律型の統計的根拠を示すことができ、旋律型の位置付けを示すことができる次の方法をとった。

まず、『明治撰定譜・箏篋譜』のうち、「香川雅正会」発行の『雅楽箏篋譜』記載の全 72 曲をデータ化し、その内 68 曲を分析対象とした。データ化の際にセルという形式を筆者が策定した。セルとはパターンの最小単位であり「仮名譜」における唱歌の大きい仮名ひとつを中心にした唱歌の仮名、運指などの楽譜データの複合体である。次に、データ化した楽曲群を「六調子」を基に分析対象群と背景群に分けた。次に、『明治撰定譜』に存在するすべてのセルタイプを抽出し、1～8セルタイプによるパターンを総当たりで生成した。次に、生成したパターンそれぞれについて統計的評価尺度である F 値を改変した値である F'_{β} 値を求め、パターンの特徴性を数値化した。次に F'_{β} 値の高い順に各「調子」ごとの特徴的パターンを各 50 パターン、合計 300 パターンを抽出した。最後に、抽出した 50 パターンのうち、20 パターンを演奏音源と照合することで、各「調子」ごとの特徴的な旋律型を抽出した。演奏音源は宮内庁式部職楽部、東京楽所、天理大学雅楽部などのものを使用した。また、パターンをコアパターン・接続パターン・補助パターンの 3 つに分類した。なお、本稿では音名や旋律型について述べる際、雅楽表記と西洋音楽表記を併記した。各「調子」の

特徴的な旋律型は本稿第四章で、特徴的パターンは付録 C で示している。

また、特徴的な旋律型を元に、各「調子」の旋律法について考察を行った。まず、各「調子」の特徴的パターンおよび旋律型において頻出であった音高に着目し、その特徴や傾向を整理した。次に、増本の旋律型および旋律法について、本研究の特徴的旋律型との比較を行い、増本の旋律型の一部は頻出でも特徴的でもない旋律型があること、旋律法の一部は本研究の結果と異なることを指摘した。また、「太食調」において「下無(F#)」が用いられる条件について仮説を立て、検証した。

雅楽における旋律型の存在と、「調子」によって旋律型が異なることは、先行研究のいくつかにおいて述べられていた。しかし、旋律型を実際に大量に示し、その旋律型がどの「調子」に何回使用されているのか、具体的な数値として出現回数を示したのは本研究が初めてであると思われる。これまで、雅楽の旋律型の研究はあまり行われてこなかった為、基礎的なデータの蓄積が重要であることは言うまでもない。本研究は、雅楽の旋律型研究における着実な一歩になりうると考える。